

# 産業的課題は「旅行の質」をいかに高めるか 描き出したい「アウトバウンド復活」への道筋

年間の訪日外国人旅行者数が1900万人を突破し、45年ぶりに日本人出国者数を上回った2015年。2000万人が確実に

## バランスの取れた双方向交流を

となったインバウンドが「次のステージ」を目指す中で、バランスの取れた双方向交流の実現に向けて、2016年はアウトバウンド復活への道筋を描き出さなければなりません。

2015年は訪日外国人旅行者が急増を続け、観光への注目度も更に高まる年となりました。9月に観光庁長官に就任された昨年を振り返っていただけますか。

観光庁の田村長官とJATAの田川会長に、2020年のオリンピックイヤーへカウントダウンが始まる新しい年への期待と意気込みを語りいただきました。

**田村** 昨年9月に観光庁へ来る前は航空局にいたわけですが、海外から日本へいらっしゃる旅行者の増加、特に、中国をはじめとするアジア各地からの航空便数が著しく拡大していることも実感していましたから、

インバウンドの勢いをシームレスに感じながら仕事をさせていただいています。訪日外国人旅行者は「昨年に史上最高を更新したばかりでしたが、昨年もさらに50%近い伸びを示して、1900万人台の後半にも届こうかという水準に達し、観光政策がインバウンドに軸足を移して10数年が経過する中で、ここ2〜3年で一気に成果が現れてきていることを感慨深く思います。また、昨年は、本当に久しぶりに訪日外国人旅行者数が出国日本人数を上回るというエポックメイキングな年となりました。

インバウンドの成果を喜ばしいと思うと同時に、バランスのとれた双方向交流の大切さを考えると、アウトバウンドについても色々と問題意識を持つきっかけとなる年だったと思っています。

**田川** 長官がおっしゃったように45年ぶりにインとアウトの数が逆転した昨年は、歴史的な1ページとなりました。また、外国人旅行者が大勢いらっしやうて、国内旅行も緒に活性化してきています。日本人とは

異なる視点で国内各地の魅力を見ている外国人旅行者に刺激されて、日本人旅行者も今まであまり行かなかったようなところへも行くようになりました。一方、海外旅行は、恐らく、1600万人前後にとどまったと思いますが、外交関係やテロの問題、感染症の影響などで、需要の増減は常にあるものの、海外旅行者の質の変化を感じる一年でもありましたから、国内・海外ともに、クオリティに対して何らかの手を打つ必要があることに気付かされた一年でした。

## 観光庁へ「三位一体」の提言書

訪日旅行者が増してきたことで、様々な課題も出てきていますが、観光庁として、特に、力を入れていることなどについて、お聞かせいただけますか。

**田村** せっかく来ていただいても入国審査で何時間もかかるようでは、第一印象からその国のイメージが悪くなってしまうということもありますから、C I Qの整備については非常に力を入れました。2カ年度連続して、当初予算だけに限らず、年度の途中であつても入管税関検疫の職員を緊急増員したり、スペースが足りないところでは、設計や工事の前倒しなども行っています。不十分と言われてきていたW i f i環境も、まだ必ずしも十分ではないとは思いますが、かなり整備が進んできました。地域によってはバスが足りなかったり、都心部ではバスの駐車によって渋滞が引き起こされるとい



田村 明比古 (たむら・あきひこ)  
国土交通省観光庁長官

1955年生まれ、東京都出身。東京大学法学部卒業、米国コーネル大学経営学大学院修了。1980年4月運輸省入省、1993年9月運輸政策局国際企画課補佐官、1995年5月在米国日本大使館参事官、1998年7月大臣官房企画官、2000年6月運輸政策局観光部旅行振興課長、2004年7月海事局港運課長、2006年7月航空局監理部総務課長、2008年7月大臣官房審議官、2011年8月鉄道局次長、2012年9月航空局長などを経て、2015年9月から現職。

# 展望 2016年の観光・旅行市場



田川 博己  
日本旅行業協会 (JATA) 会長

う問題もあります。最たるものは、大都市部における宿泊施設の不足で、大阪府ではホテル稼働率が90%を超すような事態も発生しています。空港の処理能力と宿泊施設のキャパシティというインバウンドの基本的なインフラへの対策が非常に重要であるということも改めて認識された年でした。民泊をめぐる議論も始まっていますし、長い目で見ると、宿泊業界にどうやって投資を呼び込むかという課題も出てきています。

**田川** JATAとしても、ツーウェイツーリズムによる交流大国を目指して、昨年4月に観光庁へ海外・国内訪日旅行という三位一体の提言書を出して、旅行業界として何をすべきなのかということを書かせていた

いただきましたので、具体的に取り組んでいくことができればと考えています。昨年5月の観光文化交流団による訪中などは好例ですが、海外旅行が苦戦している中で最大のポリウムゾーンである中国と韓国について、日本との関係を早く元に戻さなければならぬという課題に、具体的なアクションを起こすことができました。ウズベキスタンへ安倍晋三首相の随員として同行したの続き、ビザが相互に緩和されたインドネシアへの訪問団の派遣など、ツーリズムの重要性が高まっていることも目に見える形になってきました。

## 産業政策の推進が大きな課題に

——長官に就任された直後に、最初の太

きなイベントとして開催された「ツーリズムEXPOジャパン」については、どのような印象をお持ちですか。

**田村** 私が10数年前に旅行業担当の課長だった時から、「ツーリズムEXPOジャパン」のような形でのイベントを実現したいと考えていましたので、海外・国内訪日の旅行が一堂に会して大きな規模で開催されるようになったことは、非常に感慨深く思っています。

**田川** 昨年の第2回は、特に、47都道府県の出展内容などを見ると、海外からの出展者による展示の刺激を受けたことが分かり、さらに、その国内の展示を見て海外の出展者も影響を受けるといような相乗効果が出てくることを期待しています。

**田村** インバウンドにおけるプロモーションは向上していますから、さらに磨きをかけていきたいと思います。観光関連産業の育成・強化といった部分は、現時点でも取り組んでいるところではありますが、旅行の質をどう高めるか、宿泊分野でのインバウンド対応や投資促進、経営者の育成など、産業政策として引き続き大きな課題と考えるています。

**田川** JATAが出した政策提言でも産業政策論を謳わせていただき、その議論を深めたいと考えていますが、長官の指摘されるように産業として育成するという考え方は非常に重要だと思います。

**田村** 訪日外国人の旅行消費は昨年、

3兆円台の半ばに届くかというような規模まで拡大しています。ほかの輸出産業で比べると、自動車部品と並ぶ規模で、観光は既にベスト5に入るような輸出産業になっているわけです。近隣諸国をはじめ、世界中の国と競争している産業でもあり、その育成強化は極めて大きな課題です。

**田川** 2030年には国際交流人口が18億人まで増加すると推定されており、18億人を対象に日本のツーリズム産業論を考えると、視点も必要になってきています。JATAとしても、日本の民間サイドにおけるナショナルセンターをどう考えていくのかというような議論にも関わっていく時代に来たという気もしています。

## 国際ツーリズムで主導的な役割

——国際ツーリズムにおける日本のツーリズムというような観点については、どのようにお考えになっていますか。

**田村** 旅行業界としてはこれまで1億2000万人のうちの何%を海外に送り出すかということがメインのマーケットだったと思いますけれども、会長がおっしゃったように、18億人の市場でシェアをどこまで高めていくかという話になってくれば、全く異なるアプローチで話をしなければなりません。非常に裾野の広い観光産業の隅々まで立派にしていかなければいけないでしょうから、まさに、会長と手を携えて議論をさせていただきたいと思っています。

# 展望 2016年の観光・旅行市場

**田川** そうした議論は、事業者だけでなく国民の皆さんにもお話をさせていただく必要があるのではないかと考えています。また、国際ツーリズムの中で日本のリーダーシップを発揮するという観点からは、「ツーリズムEXPOジャパン」での「国際観光フォーラム」の枠組みを活用するという方向性もあるのではないかと考えています。

**田村** 世界の観光産業のリーダーに集まってもいい、産業が抱える課題を議論してもいいというのは、非常に良い方向性ではないでしょうか。わが国も久しぶりに国連世界観光機関(UNWTO)の理事国となりましたから、国連の機関であるUNWTOで色々な課題に関わりつつ、わが国のリーダーシップの取り方を考える良い機会にしたいと考えています。



田村長官「インバウンドの高いレベルを目指します」

## テロに負けない強靱な旅行環境

—— 双方向交流や地域間交流の拡大に向けて、アウトバウンドの役割や意義をどう捉えていけばいいのでしょうか。

**田村** アウトバウンドについて成果が得られた最近の取り組みとして、日中韓観光大臣会合の中で、3カ国間の交流を飛躍的に拡大していくことが合意されたことに注目したいと思います。さらに、昨年の動きで言えば、中国やインドネシアへの訪問団派遣、ウズベキスタンとの覚書調印など、今後も軸になると思われる活動が行われていますから、合意されたことの実施や同様の動きを拡大することが重要になると思います。それから、日本のアウトバウンドには、テロの問題も大きいのしかかつてきています。二国間というよりも多国間の取り

組みになつていくかもしれませんが、テロに負けない強靱な旅行環境が作れるような国際間の協調も進めていく必要があると感じています。

**田川** 政治問題などが影響する日中や日韓のような隣国については、積極的に動いた方がよいのではないかと考えています。先般、UNWTOのタレプリファイ事務局長を訪問した時にも、日中韓の観光大臣会合が日本で開催されたことを高く評価していただきました。こうした会議を定期的に継続して開催すると同時に、かつての欧州における周遊の定番だった「ロンパリローマ」のような形で「北京・ソウル・東京」を周遊するようなツアーが増えてくれば、日中韓の3カ国による連携を示すことができそうです。今後、ラグビーのワールドカップやオリンピック、パリオリンピックなど大きなイベントが控えていますから、プロモーションも行ってやすくなるだろうと思います。「ツーリズムEXPOジャパン」などの場合でも、そうした取り組みを上手く表現して、一般の皆さんにも双方向交流の重要性への理解を深めていただくことが必要なのではないでしょうか。

## 2つの「日本ブランド」を確立

—— 2016年の決意や観光庁への要望などをお聞かせください。

**田川** まず、海外旅行の復活を宣言しなければならず、2016年は「復活の年」

にしたいと考えています。その起爆剤として、中国の武漢で開催される日中韓観光大臣会合が重要になるはずですが、訪日外国人旅行者が急増する中で、どうしてもインバウンド一辺倒になりがちですが、長官もツーウェイツーリズムを柱に据えていらっしゃるのです。是非、JATAによるアウトバウンドへの取り組みにご協力をお願いしたいと思っています。同時に、旅行会社のステータスとして、価値をしっかりと表現していかなければなりません。DESTINEーションとしての日本へ来ていただくための「日本ブランド」と、国際旅行市場における「日本人旅行者のブランド」というものもありますから、この2つのブランドを作り上げることに精力を注ぎ、それを「ツーリズムEXPOジャパン」の中でも表現していきたいと考えています。

—— 観光庁長官としての抱負や旅行業界への要望をお聞かせいただけますか。

**田村** 会長がおっしゃったことについては、可能な限り、協力をさせていただきたいと思っています。今年にはさらにインバウンドの高いレベルを目指していきますが、そのために出来ることは全てやるということですから、世界中のベストプラクティスをわが国に取り入れなければなりませんので、地球規模で旅行商品を造成しているJATA会員の旅行会社から情報の提供やアドバイスをいただけるのと有り難いと思います。



田川会長「旅行会社として価値をしっかりと表現します」